

大津島



ともに汗を流し、 島の人々の「やってみたい」を実現

大友 翔太 (おおとも しょうた)

東京都出身。拓殖大学を卒業後、平成22年12月～26年3月まで、地域おこし協力隊員「島おこし隊員」として大津島で活動。任期終了後の同26年度からは、周南市教育委員会馬島公民館主事として勤務し、大津島観光協会事務局としてこれまで同様の地域づくり支援を行っている。

本浦石風呂でのお花見にて。
右端が筆者。



◆「島の人」との最初の出会いで心を決める

平成二二年一二月。私は島おこし隊員として周南市大津島に着任した。

この島と私の間には縁もゆかりもなく、はじめて大津島に行ったのは、島おこし隊員の募集情報をインターネットで知った同年一〇月だった。

一二時間ほどの短い滞在時間だったが、できるだけ多くの住民と話をし、島の現状や歴史を覚えてもらった。初対面にも関わらず、地域の皆さんは、とても親切丁寧に東京から来た謎の若者の相手をしてくれた。そのとき私は「この島のために働きたい。この人たちのために役に立ちたい」と強く思った。島の人——それが大津島を選んだいちばんの理由だった。

大津島は、私が着任した当時、人口は四〇一人、世帯数二四九、高齢化率は七一・六パーセント。その時点ですでに、時代の最先端を進む高齢化地域で、住民の皆さんに話を聞いてみると、コミュニティの維持、人口減少、空き家、UIターン、買い物、病院、離島航路など、過疎と高齢化が要因となる課題が多く、それ以外にもイノシシの被害をいちばんの困りごととして抱える地域だった。

島おこし隊員のミッションは大きく分けて四つある。

①地域とのコミュニケーション

② 情報発信

③ 地域の活性化計画「夢プラン」の作成支援

④ 夢プランの実践活動の支援

大津島での協力隊員の仕事は、多岐にわたった。時には民泊のコーディネートを行い、時にイノシシの狩猟を手伝い、ある時は、桜祭りで鯛をさばっていたこともある。一定の〈形〉にはまらず、臨機応変に地域の色に合わせて仕事や、自分のポジションを変えていくことが大切だった。そのためには、地域としっかりコミュニケーションをとり、現場とともに汗を流しながら、少しずつ信頼を得ていく。いちばん時間と労力がかかる選択かもしれないが、信頼という下地なくして、地域に変化を起こすことは難しい。

私が地域に馴染むために、具体的にいったことをシンプルド。「人の名前と顔を覚える」「地域行事へ参加する」「話をする」。着任してからの平成二二年一二月一、二三年三月の四ヶ月間は、ひたすらこれを繰り返した。右も左もわからない若者に対して、島の皆さんは「あんたこんなことも知らないんかね!」「大学行っても嫌も使えんじゃつまらんのお」と、日々可愛がってもらい、島で生活する術、地域を歩く術も教えてもらった。

情報発信は、コミュニティ紙「潮流」の発行、ラジオ出演、TV取材、ブログ、フェイスブックなどの更新を実施し、外部人材だからこそみえてくる大津島の魅力について

発信を続けた。

平成二三年度からは、地域の活性化計画（夢プラン）の作成支援を行った。まず、地域の現状や課題の聞きとり（およそ二〇〇世帯）を実施し、集落ごとに地域の現状や課題、魅力について話し合いを行った結果、「安心して暮らせる地域をつくる」「地域のよさを生かして元気な地域をつくる」この二つを活動の柱にした〈夢プラン〉が完成した。

◆ともに汗を流し活動し続けることで変化が生まれた

平成二四年からは、〈夢プラン〉の実践活動の支援を重点的に実施した。

主な取り組みには次のようなものがある。

- ① 港や農協、診療所と集落をつなぐ島内移動手段の確保
- ② 地域の行事や草刈りなどの予定を出身者へお知らせする「ふるさと便り」

の発行、出身者の有志の皆さんが地域活動を支援するために発足された「若潮の会」の活動の支援

③ 島内にある史跡



徳山港の沖合い10kmに浮かぶ周囲20.9km、面積4.73km²の細長い島。良質な御影石を産出し、人間魚雷「回天」の発射訓練基地跡などがある。

を住民の皆さんと一緒に整備し、島の歴史を後世に残すとともに、新たな島の魅力として情報発信

- ④ 住民が先生となり、都市の子どもたちへ漁業や農業、釣り、竹細工、島料理などの体験をさせる交流活動の支援



夏休み子ども体験の受け入れ。

- ⑤ 市内の小学校五・六年生、五八名の一泊二日の民泊体験の受け入れの支援
- ⑥ 賃貸や売買可能な空き家の発掘、移住希望者からの相談に対応する案内人の設置の支援
- ⑦ 地域コミュニティ紙「潮流」のリニューアルや編集・校正・執筆を住民が行う体制づくり
- ⑧ 耕作放棄地へ牛を放牧して除草させ、農地を再生する山口型放牧の導入。再生した農地で野菜、小麦、サツマイ

モを耕作する住民グループ「本浦垣の内農園」の設立支援。耕作した作物の活用や販売の支援など

これらの活動を始める際には消極的な意見もあったが、三年間地域住民とともに汗を流し、活動を続けていくことにより、少しずつ地域に前向きな意見や変化が生まれた。着任当初は「あんたらに何ができるね?」「何をしてもだめっちゃ」といつ

た意見をよくいわれた。しかし、現在では「自分たちが中心になってやらにゃいけん」何か協力できる事があつたらいいさんね」と声をかけてもらえるようになり、実際に住民が代表で活動を牽引していく新しい取り組みも生まれてきた。

地域おこし協力隊員として活動す



耕作放棄地を再生した畑での小麦収穫。



地域の現状・課題を把握する聞き取り調査。

る中で、私が最も重要だと思ったこと、それは「地域密着型の協力隊員の必要性」と「地域の体力の限界値の見極め」である。

高齢化がとくに進んだ地域では、最初から住民が主体的に動くことは難しく、地域の実情を理解した人間のサポートが必要不可欠だと思う。地域住民と「協働」することで、地域に「安心感」や「まだやれる！」という自信を与えることにつながる。それらが動く原動力となってくる。

そして地域の「やってみたい」を実現するのも重要な仕事だった。住民のいざばん近くに存在するため、普段はなかなか届きにくい小さい声も、しっかり拾い上げて実現することで、地域づくりの推進力が増していった。

大津島のように超高齢化地域では、地域の「体力と持続力」は無限ではない。地域の中で活動できる

人は、時間の経過とともに減少し、限られた人間で動かなければならぬ。ゆえに一人にかかる責任と負担は、増え続けてしまっている。地域の体力のバランスを考慮しながら、活動をしていくことは非常に重要なことであり、無理を強ければ貴重な人材を失いかねないのである。

◆集大成としての「アイランダー2014」への参加

私が大津島に引越してきてから三年半が経過し、平成二六年六月一日の段階で、人口三三四人、世帯数二一四、高齢化率七二・八パーセント。つまり六七人の人口減、三五世帯減、高齢化率一・二パーセント増という厳しい状況は変わらない。

だが、この三年間で大津島は、「夢プラン」を作成し、新規事業に挑み、民泊まで実施したのだ。これは当時から考えられない変化である。

「住民×隊員×市」それぞれが協力し、今後の取り組み方向について共通認識を持ち、長続きする活動になるよう住民に過度な負担のない事業を展開していくことが重要である。もちろん、地域住民の努力あってこそではあるが、大津島でさまざまな事業を進めることができたのは、この構図がしっかりしていたからなのかもしれない。

私には隊員の活動の集大成として描いた夢がある。それは「アイランダー2014」への参加だ。現在、地域住民

が主体となるアイランダーに向けた組織を立ち上げ、準備を進めている。

地域住民の視点で、「島の歴史や史跡」「伝統料理・芸能」「空き家情報」「島の怪談」など島の自慢が詰まった「大津島まるごとパンフレット(仮)」を作成する予定だ。よりローカルでダイブな大津島の魅力を伝え、多くの人に大津島に興味を持ってもらい、実際に足を運んでももらえればと思う。

平成二六年三月で、地域おこし協力隊員の活動の任期が

終了した。

この間、住民の皆様をはじめ多くの人に支えていただいた。心より感謝を伝えたい。

「ありがとう。大津島」

現在は、公民館に勤務しながら「地域の若者」として活動を続けている。今後は、お世話になった大津島を私が支える存在になれるよう努力し、島を守っていききたいと思う。私と大津島の「島おこし」は、まだまだ続いていく。■

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

本市は山口県の東南部に位置し、新幹線のぞみが停車する徳山駅を中心に、北は中国山地、南は瀬戸内海に浮かぶ大津島、臨海部には国内有数の石油化学コンビナートが広がるなど自然と産業が調和した15万人の都市です。

また、離島“大津島”をはじめ人口減少や少子高齢化の進展が著しい中山間地域が市域の7割を占め、今後、本市が将来に向かって持続的に発展していくためには、これらの地域の振興が大きな課題となっています。

●隊員の活躍

こうした中、本市で最も人口減少や高齢化が進展し生活や集落機能が著しく低下している大津島の活性化を図るため、20歳代の島おこし隊員3名を配置し、地域課題の解決や地域のよさを生かした地域づくりに取り組んできました。

この3年間、隊員の活動や存在により、行政的にいえば、新たな島内交通、移住者の受け入れ体制、出身者のネットワークなど、地域を守るしくみが構築されたことが成果です。重要なポイントは、外からみれば大したことではありませんが、会合や活動に参加、協力する人が増えたこと、前向きな取り組みが増えたことなど、地域の潜在的な力を引き出したことだと考えています。

●これからへ向けて

島の代表者からは「3年後も何とか隊員を島に残したい」「若者の存在が生活の中での安心感につながっている」「消防署がない島で暮らしを守る消防団に加入してくれて助かっている」など、業務とは関係なく、ひとりの住民として若者の存在が大きいことを、高齢化率が7割を超え、地理的に生活条件の厳しい離島の切実な思いとして再認識させられました。

さらには、主役は住民、隊員はあくまで黒子として活動してきましたが、島内外より、隊員は観光や特産品開発など具体的な活動をすべきとの批判もいただきました。

今後、これらを踏まえながら、本年度は、大津島の魅力のPRや全国の島々の取り組みを学ぶため、「アイランダー」へ初めて参加する予定です。島に残った2名の元隊員が実践者として、地域の皆さんと一緒に、安心して暮らし続けられる、住んでみたいと思ってもらえる地域の実現に向けて挑戦してもらいたいと考えています。

市としては、引き続き、地域の取り組みを支援するとともに、雇用を生む産業がなく、コミュニティビジネスすら成り立ちにくい小規模離島の実情に応じた定住対策など国の支援にも期待しつつ、独自の取り組みを検討するなど、離島の振興に努めてまいります。

(山口県周南市地域振興部中山間地域振興課 菅田浩司)